

工業高校における生徒・教員の海外研修参加の必要性について

～JICA 教師海外研修に参加して～

愛知県立半田工業高等学校

教諭 山口貴士

1 はじめに

近年、文部科学省ではグローバル人材育成として、“若い世代の「内向き志向」を克服し、国際的な産業競争力の向上”を図っている。その中で、高校生対象の留学促進活動として「トビタテ！留学 JAPAN」を行っており、海外で学ぼうとする生徒を支援している。

愛知県教育委員会では、海外について学ぼうとする生徒のために「高校生海外チャレンジ」として費用助成を行い海外渡航を支援している。また助成だけでなく「専門高校生海外インターンシッププロジェクト」も実施している。

公益社団法人 全国工業高等学校長協会においても“国際感覚を身に付ける教育が工業高校において求められている”とし、「高校生海外研修」を実施している。この研修では、生徒数が定員に満たない場合、教員参加も可能となっている。教員のグローバル人材育成能力の向上支援も行っている。発表者は、平成 29 年度この研修に参加を希望した。

公益財団法人 産業教育振興中央会では“産業教育の充実・振興、国際交流等に寄与することを目的”とし、「教員海外産業教育事情研修」が行われている。なお発表者は、平成 19 年度に、この研修に参加し、アメリカ合衆国で産業教育事情を視察している。

独立行政法人 国際協力機構(以降 JICA)では、国際理解教育に関心を持つ教職員を対象に「教師海外研修」を実施している。この研修は、参加するだけでなく、訪問によって知見したことを帰国後に授業などで生徒に伝えるまでの研修となっている。その中で、写真や動画、音声などで海外の様子を伝え、課題を与えてアクティブラーニング(ワークショップ)を生徒に実施している。それにより海外と自分との関わりについて生徒が主体的に考える機会を持たせている。

この後、平成 28 年度 JICA「教師海外研修」に参加した報告をさせて頂く。

2 背景

愛知県立半田工業高等学校(以降、本校)は、愛知県の知多半島に位置し、重化学工業の大工場や自動車関連企業を中心とした工場があり、自動車産業の一翼を担っている。

本校生徒に対する有効求人倍率は約 6 倍であり、世界規模のグローバル企業も多くある。その中で、工業高校卒業の労働者は現場で中核を担っており、海外勤務に対して期待している企業が幾つかある。また就職先では外国人労働者が在籍していることや、労働者のほとんどが外国人労働者である企業もある。新入社員研修で海外研修が実施されている企業があり、海外勤務に必要となる英訳卒業証明書発行が平成 27 から 28 年度にかけて約 30 件となっている。このような背景の中で、教員自身がグローバルな視点を持ち、グローバル人材育成能力を養うことは急務であり、必要不可欠となっている。

3 JICA 教師海外研修概要

期間：2016 年 7 月 31 日～8 月 6 日(7 日間)

訪問国：フィリピン共和国(以降フィリピン)

視察先：

- ①Phil Nippon Technical College(PNTC)
- ②Sampaguita National High School
- ③BANDAI NAMCO Philippines Inc.
- ④Epson Precision Philippines Inc.
- ⑤Yamaha Motor Philippines Inc. など

研修日程：

- ①国内事前研修(4 日間)
- ②海外研修(7 日間)
- ③事後研修(2 日間)
- ④授業実践活動(本校内 2 日間)
- ⑤授業実践報告会(2 日間、1 日目準備)

※1. 以降①～⑤を教師海外研修、①③④⑤を国内研修、②を海外研修とする。

※2. ①③⑤については土曜日または日曜日に JICA 中部にて実施された。

参加者数：(JICA 中部)

国内研修 40 名程度、海外研修 20 名程度

授業実践報告会 100 名を超える参加者
国内研修、海外研修共に定員を超える応募があるようだ。

4 海外研修について

教師海外研修では、フィリピンの社会的情勢や工業教育などについて視察した。施設が不足している中、一生懸命に学ぼうとしている Sampaguita National High School や、しつけ、マナー教育を熱心に行っている Phil Nippon Technical College などを視察できた。

日系企業訪問では、

- ①BANDAI NAMCO(バンダイナムコ関連)
- ②Epson Precision(エプソン関連)
- ③Yamaha Motor(ヤマハ発動機関連)

バンダイナムコおよびエプソン製造製品は、フィリピン国内で販売しておらずフィリピン国外で販売するためのものとなっており、労働者確保のためのフィリピンへ進出しているようだ。それぞれ生産している製品は少数生産で機械生産が難しく多くの人手が必要であるようだった。学校訪問、企業訪問を含めて私的な海外旅行では視察が難しい場所へ訪問できて有意義な研修となった。

5 生徒への報告(授業実践活動)

生徒への報告は、世界規模の地元企業である AGC 旭硝子、(社)日本ワーキングホリデー協会、NPO アイキャンなどの協力を得て実施することができた。フィリピンとの Skype 交流や、「職場で外国人と良好な関係を築くために」という題材でアクティブラーニングを行った。

これにより①地域連携、②産学連携、③キャリア教育、④グローバル教育、⑤アクティブラーニング、これら 5 項目を同時に行うことができた。また、生徒への課題としてレポート作成の出題を課した。レポートからは、外国人労働者と自分を比較することで、自分自身が工業高校で、いま何をすべきか主体的に考えるきっかけとなったことが良い授業実践になったと考えている。

6 まとめ

工業高校は、ものづくりを通じて社会に貢献できる人材の育成に努めてきた。現在、国内外の産業において即戦力となる、知識・技術を身に付けた人材が求められている。工業高校の卒業生が多く就職する産業界では、世界的な競争と共生が進む中で、専門性と共に、異なる言語

や文化に対応できる協調性や、主体的に行動できる能力、コミュニケーション能力を身に付けた人材が求められている。

工業高校が更なる発展を目指すためにも「ものづくりは人づくり」の原点に立ち返り、日本や世界の産業界で活躍できる人材の育成を目指すことが必要であると考えます。これまでも産学連携により、日本の製造現場を支える人材育成に取り組んできた。今後は産業界が進めている世界戦略に対応するため、生徒や教員の海外研修を利用してグローバル人材育成を推進していくことが急務であると考えます。

7 考察

昨今、基礎基本の技術の習得やコミュニケーション能力の向上に努めている工業高校において、さらに企業や社会から認められるような工業高校の特色を出すのは非常に困難な状況であると考えます。今回、生徒、教員の海外研修を題材に「社会が認める工業高校の特色」について考えた。今後、工業高校の更なる活躍を考えると、海外研修のみならず、「社会が認める工業高校の特色」づくりを実施していかなければならないと考える。それはトップダウンばかりでなく、教員が日常的に生徒や企業と接する中で気付いたことから創出し、教員が主体的に考えて実行していくことが必要であると考えます。この題材をきっかけに、現場の教員が主体的に考え創出した「社会が認める工業高校の特徴」が今後、多く出されていくことを期待している。

8 参考資料

- ①文部科学省「グローバル人材育成推進事業」Web ページ 2016 年 5 月 15 日アクセス
- ②文部科学省「トビタテ！留学 JAPAN」日本代表プログラム【高校生コース】募集要項
- ③愛知県教育委員会高等学校教育課「平成 29 年度高校生海外チャレンジ促進事業実施要項」
- ④愛知県教育委員会「専門高校生海外インターンシッププロジェクト」Web ページ 2016 年 5 月 15 日アクセス
- ⑤公益社団法人 全国工業高等学校長協会「第 17 回高校生海外研修実施要綱」
- ⑥公益財団法人 産業教育振興中央会「平成 28 年度教員海外産業教育事情研修派遣実施要項」